

目次

1. 事務局より
2. 昨年度の編集責任者より
3. 新編集委員のプロファイル
4. 本年度の編集責任者より
5. 運営・企画担当より
6. 今後の例会予定
7. 各地の研究会だより
8. 海外雑誌論文目録作成について
9. いま、フランスでは...
10. 編集後記

ご来場にあたっては、事前に日時や場所をご確認ください。なお、春の仏文学会のおりの例会や、シンポジウム、特別発表等に関しては会員の皆様全員に郵送によるご案内もしています。この郵送の仕事は現在、広島大学の井口容子氏にお願いしています。

2. 昨年度の編集責任者より

○ 一年間『フランス語学研究』の編集責任を担当しました。重責に気の休まる事はありませんでしたが、同時にたいへん充実した一年でもありました。編集委員は勿論、ご投稿いただいた学会員の方々、また企画から印刷まで惜しみない御協力を戴いた皆様に心から御礼申し上げます。

○ この41号から新企画として「フランス語質問箱」が始まりました。フランス語を勉強したり教えたりする上で生ずる疑問や難問を解決するためのお手伝いをしようというコーナーです。第一回は冠詞、半過去という謂わばフランス語学の永遠の大物を取り上げましたが、今後は専門家でも見逃しがちな疑問、意表をつく質問などを編集委員あるいは事務局宛に数多くお寄せ下さい。

○ また原稿のジャンルと投稿規定にかんして次の42号から変更があります。

先ず従来の「語法ノート」や本号掲載の「語彙ノート」などはジャンルを一括し、名称も「フランス語メモ」となります(枚数は2枚以内です)。語法や語彙に限らず広く音韻、形態、統辞、意味、その他の分野を対象に、これまで研究テーマとして取り上げられた事はなくても、今後研究する価値のある問題を紹介するものです。

また従来の4枚以内から5枚以内に増頁される「研究ノート」はこれまでと同様、直ちに論文として投稿するほどにはまとまっていなくても、将来は論文に結実する可能性のある内容を持つものを指します。

さらに「対照研究」はジャンル名としては41号が最後になります。対照言語学は比較言語学、通時言語学、等々と同じく言語研究の方法の一つですから、「論文」、「研究ノート」などの区分とは性質が異なります。フランス語と日本語、フランス語と英語などの対照研究は今後は「論文」、「研究ノート」などとして投稿していただくようお願い致します。

最後に「論文」、「論評」、「紹介」、「新刊紹介」の枚数は

1. 事務局より

事務局は2006年4月に、慶應義塾大学から福岡大学人文学部に移転しました。事務局としての業務は、福岡大学と西南学院大学との協力で行っています。

住所・所属機関等に変更があった場合は、電子メールあるいは郵便で、できるだけ早くご連絡をお願いします。転居先不明で郵便物が戻って来るケースが増えています。

〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1

福岡大学人文学部内 日本フランス語学会事務局
メールアドレス: sjlf@fukuoka-u.ac.jp

本年度あるいは過年度の会費をまだ納入されていない方は、下記の郵便振替口座に振込をお願いします。

郵便振替口座番号 00160-6-56308

2年以上会費を滞納された方には、学会誌『フランス語学研究』はお送りしていませんのでご注意ください。また、『フランス語学研究』のバックナンバーの販売はフランス図書に委託しております。購入希望の方は直接同書店にお問い合わせください。

〒160-0023 新宿区西新宿1-12-9 フランス図書
電話: 03-3346-0396

日本フランス語学会の例会は原則として、4月から12月まで(8月を除く)、毎月第3あるいは第4土曜日、15時から18時、東京大学駒場キャンパス(2007年度)で開催されます。通例、10月の例会は京都が開催地となります。例会についての詳細は学会ホームページ(<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/belf/home.html>)、メーリングリスト(f-ling@french.lang.osaka-u.ac.jp)の他、月刊『言語』(大修館)と『ふらんす』(白水社)でお知らせをしています。

従来どおりです。

本誌は会員のみなさまの投稿なくしては成り立ち得ません。どうか奮ってご投稿下さいますようお願い申し上げます。

○ 2006年度をもって赤羽研三さん、阿部宏さんが辞任されました。赤羽さんは文学がご専門ながら当学会の運営に多大の御尽力を戴きました。また阿部さんは10年以上の任期の中で運営委員を二度も担当され、数多くのシンポジウムの企画に当たられた他、あらゆる面で学会に極めて大きな貢献を果たされました。長きにわたってご協力を惜しまれなかった両氏に編集委員を代表して深く御礼申し上げます。

2007年度からは石野好一さん、六鹿豊さんが再任、金子真さんが新任されます。

○ 次号の編集責任者は西村牧夫さんです。会員のみなさまからはこれまで通りのご協力を戴きますようお願い申し上げます。 (前島和也)

3. 新編集委員のプロファイル

◆ 石野好一 (愛知県立大学)

この4月から愛知県立大学に所属が変わりました。前任校の東京都立大時代に編集委員と事務局を仰せつかったことがありましたので、編集委員は2度目ということになります。

フランス語学会の前身、フランス語学研究会の例会で初めて発表したのは1979年の春でした。そのときのテーマは動詞の意味分析で、それ以後、もっぱら意味論と語用論を主な研究分野として、いくつかの表現の意味、用法、ニュアンスの分析をしてきました。

これまでに扱った表現は動詞の他、接続表現や緩和・ぼかし表現などですが、どちらかという人があまり手をつけていないものが好きです。先行研究をたくさん読まされなくて済むこともあります。v(^ ^), それよりも、皆がやっていることには興味湧かないという性格によるところが大きいようです。

その意味では、編集委員には向かないかもしれませんが、こうなった以上は、私の書いてきたようなつまらないものではなく、独創的で楽しい発表や投稿がどんどん出てくることを期待したいと思います。

冒頭に書いた私の初めての発表は東大駒場で行われました。そこが当時の例会の会場でした。それから30年近く、会場がいくつかの大学を転々とした後、今また駒場に戻っているのは、なにやら懐かしい気持ちになります。そういうときにふたたび編集委員に指名されたのも、何かの縁かもしれません。よろしくお願いいたします。

◆ 金子真 (岡山大学)

今年度から編集委員に加えていただくことになりました。これまでフランス語学会にさしたる貢献がないことを自覚しているので、非常に恐縮しています。しかしとにかく、自分にもできそうな仕事を探して、非力ではありますが力を尽くしていきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

ところで、私のように微々たる業績しかあげていない者になぜ声がかかったのか、最初は正直戸惑いました。その後いろいろ考えあわせ、次の二つの仮説を立てました。

一つは、フランス語学会が、フランス語の研究のみならず、フランス語とその他の言語の対照研究にも力を注いでいて、そうした方面で、なにかしら役割を果たすことを求められているからではないか、というものです。そうすると、ここ数年、「電話がなっている」といった単一判断文や「きれいな花!」といった喚体句、さらには「よりによって太郎なんかやってきた」といった文における取り立て詞「なんか」が、フランス語ではどのように表現されるか、といったことを調べている私が招集されたことも、少しは腑に落ちます。

もう一つの仮説は、最近『フランス語学研究』掲載論文でも増えつつある、形式的なアプローチへの対応を期待されてのことではないか、というものです。実際、私は上記のような日仏対照研究を、主として形式意味論・語用論の枠組みを用い、できるだけ明示的な形で進めようと努めています。

今後、編集委員の仕事にたずさわりながら、この2つの仮説を検証しつつ、語学会への自分なりの貢献の仕方を探っていきたくと思えます。そのためにも、新任委員としては出すぎた勝手な要望かと思えますが、形式的なアプローチをとる方や対照言語学に興味をもたれている方からも、積極的な発表・投稿をお待ちしています。

◆ 六鹿豊 (白百合女子大学)

私が編集委員をやらせていただくのは、実は2度目です。前回は、15年ほど前の研究休暇を機に退任し、以後、編集委員の方々のご苦勞を目にしながらも、さまざまな事情が重なって、お手伝いすることができず心苦しく思っていました。縁あって、今回また参加することになりましたが、新人同様ですので、ほかの委員の方々にいろいろ教わりながら活動していきたいと思っています。

前回の始まりは1985年でした。その前年まで編集委員として名を連ねておられたのは、もう実務を担当されなくなっていた年配の大先生方が多かったのです。そこで、語学研究会(語学会の旧称)を切り盛りなさって

いた木下先生が働きかけられて、若手のみからなる編集委員会に切り替わりました。木下先生も、編集実務は続けてくださりながらも委員は退任されたので、前からの留任は泉先生だけという新編集委員会でした。これが今の編集委員会の原形です。

以来かなりの年月が経ちましたが、あらたなメンバーに事欠かず、委員会がうまく運営され続けていることは心強い限りです。もちろん、それは各委員の方の献身があったからこそで、一学会員として感謝の念にたえません。これからも、手づくり的で風通しがよく、肩肘張らない友好的な雰囲気フランス語学会とその編集委員会であり続けるよう、及ばずながら、私も努力いたします。

4. 本年度の責任編集者より

2007年度『フランス語学研究』の編集責任は、私、西村が引き受けることになりました。おそらく、歴代の編集責任者の中で最年長でしょう。また、この役目が中国山地の頭越しに関門海峡を越えて九州在住者に任されるというのも初めてのことになります。私自身はあまり研究者としての自覚がなく、積極的に学会に関わった経験ありません。その負い目から、少し協力しなければと4年ほど前に編集委員になりました。しかし、ある事情でここ数年、本を読めるのはほとんど移動中の乗り物の中だけという状態で、正直に申し上げて、責任ある立場になるというのは「想定外」のシナリオです。

学会運営は長い間首都圏の方々の善意とご苦勞に依存してきました。やがて、その業務の一端を関西が担うようになり、編集責任も関西や東北の編集委員が受け持つ事例が出てきました。また、現在、事務局は福岡大学に移っています。このような流れから、自分の年齢とか学会との関係の希薄さとかを理由に逃げ回ってはいられないと観念した次第です。

幸い、日本フランス語学会は、今や、そのレベルの高さや研究活動の活発さ、財政の健全性などから見て、極めて良好な状況にあると思われまます。また、インターネットの発達で、委員・会員相互の連絡や原稿等の受け渡しが迅速かつ安全に行うことができます（メーリングリスト“fr-ling”の存在も忘れることができませんね。最近、語学的な議論が低調なのは残念ですが）。編集委員会のメンバーも優秀で、しかも若手・中堅・ベテランとバランスがとれています。さらに、歴代の編集責任者および委員の方々の努力で、学会誌のジャンル分けや執筆要項、編集スケジュールなどが着々と整備されてきています。

以上、楽天的な現状分析となりましたが、基本的には中継ぎ的なスタンスで今年度の編集を進めるつもりです。

すっかり堅く（薄く）なった頭と遠隔地というハンデの克服は、ひとえに会員の皆さんの双肩にかかっています。よろしくご協力のほどお願いいたします。（西村牧夫）

5. 運営・企画担当より

2006年度は、通常の例会に加えて、5月にシンポジウム「文学テキストのコーパス分析—フランス語・英語・日本語」を開催し、さらに11月にAnne Zribi-Hertz パリ第8大学教授の特別講演会を開催しました。それぞれ阿部宏氏と井元秀剛氏の企画によるものです。また12月の例会では半過去をめぐるシンポジウムを行いました。運営担当という立場上、この一年間、全ての例会発表を聞かせて頂きました。いずれも充実した内容で、随分勉強させてもらったというのが実感です。例会発表者をはじめ、関係の皆様へ改めてお礼を申し上げます。

2007年度も、5月18日に木下光一先生の特別講演会、翌19日にシンポジウム「視点をめぐって—文学と言語学の観点から」が計画されています。

ところで、例会発表の申し込みには特に期限はありません。いつでも申し込めるということが、かえって申し込みをためらう原因の1つになっているのではないかと思うことがあります。運営担当の立場からすると、できれば1月から3月あたりに次年度の申し込みをして頂ければ一番有難いというのが正直なところです。本学会は、発表1時間、質疑応答30分で、他の学会に比べ十分な時間がとれるのが特徴です。場所が東京に限られるため（例年10月は京都で開催します）遠方の方にはご不便をおかけしますが、特に院生などの若手の方、あるいはこれまであまり発表をなさっていない方には是非お勧めしたいと思います。関心のある方は学会事務局、またはお近くの編集委員までお気軽にご連絡下さい。

また昨年度に引き続き、共同研究の企画募集も行っています。詳しくは学会のホームページか『フランス語学研究』の巻末にある案内をご覧ください。

今年度の運営は、関東が山田博志（筑波大学）ともう1人（このニューズレターがお手元に届く頃には決まっているはずです）。関西は昨年に引き続き、井元秀剛氏（大阪大学）と大久保朝憲氏（関西大学）が担当します。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。（山田博志）

6. 今後の例会予定

6月23日（土）

東京大学（駒場）10号館3階会議室 15:00-18:00

守田貴弘（EHES/東京大学大学院）「空間移動概念と

その統語的実現に関する日仏対照研究」(仮題)
安西記世子(大阪大学非常勤)「複合過去の機能と主観性に関する一考察」(仮題)

7月15日(日)

慶應義塾大学(三田)大学院校舎314 13:00-16:00
森香奈絵(神戸女子大学非常勤) 題未定
大久保伸子(茨城大学)「Quand j'étais petit, je croyais ... 半過去の非自立性と未完了性について」(仮題)

9月29日(土)

東京大学(駒場)10号館3階会議室 15:00-18:00
中尾和美(東京外国語大学非常勤) 題未定
1名未定

10月14日(日)

京大会館211室 14:00-17:00
山本大地(大阪大学大学院) 題未定
小田涼(関西大学非常勤) 題未定

11月17日(土)

東京大学(駒場)10号館3階会議室 15:00-18:00
山本香理(関西学院大学大学院) 題未定
志村佳菜子(慶應義塾大学大学院)「雑誌広告における借用英語について」(仮題)

12月15日(土)

東京大学(駒場)10号館3階会議室 15:00-18:00
武本雅嗣(山口大学) 題未定
春木仁孝(大阪大学) 題未定

7. 各地の研究会だより

◆フランス言語学を一緒に勉強する会

長い間、慶応大学に会場をお願いしてきましたが、今年の4月から会場を上智大学(2号館7階の外国語学部フランス語学科共用室)をお願いすることになりました。

月一回、土曜の15時から18時まで研究会を開いています。この研究会での発表は一人3時間ですが、発表者が話すのと同じ位、参加者からの質問や感想もあり、時間はあっという間に過ぎていきます。最後に参加者全員に意見を言ってもらおうという全員参加型のスタイルも、この勉強会の大きな魅力となっています。皆さんもこの勉強会に参加して、研究のプロセスを共に辿っていく楽しみを是非味わっていただきたいと思います。

昨年度は以下のような発表がありました。

4月22日 中田俊介(東京外国語大学大学院DC)「フランス語のリズムと情報構造」

5月6日 喜田浩平(慶応大学)「意味論と語用論の境界」

6月10日 赤羽研三(上智大学)「描写と語り」

7月8日 館脇晋一郎(茨城高専非常勤)「アラン・ロブ＝グリエの小説作品」

9月16日 山田博志(筑波大学)「"どこ見てるのよ/*Ouvoyez-vous" をめぐって」

10月21日 Tuchais Simon(上智大学非常勤)「日本語の文末思考動詞表現」

11月11日 宮本直規(東北大学大学院)「«N0-voir-N1-現在分詞»構文での質的限定—N0 と対象との距離—」

12月9日 小宮美奈(宇都宮共和大学非常勤)「カテゴリ-oiseauにおけるカテゴリ-moineauの語彙化されたプロトタイプ性 -ワロン語の語彙への認知的アプローチの試み—」

勉強会での発表を希望する方は世話人、川口順二 <jnikawa@attglobal.net>, 前島和也 <kazuyax@econ.keio.ac.jp>, 大久保伸子 <okubo@mx.ibaraki.ac.jp> まで御連絡下さい。論文や著書の紹介・論評なども歓迎いたします。

案内はメーリングリストFrenchlingでのみ行い、郵送による通知は行っておりません。Frenchlingに加入しておられない方は世話人のアドレスにお知らせいただければ、個人宛にメールでご案内します。今年度前期の予定は以下の通りです。

4月14日 川口順二(慶応大学)「Allerと未来」

5月12日 渡邊淳也(筑波大学)「間一髪半過去の(imparfait d'imminence contrecarée)」

6月9日 安齋有紀(青山学院大学大学院DC)「日仏両語における主体間調整の対照研究」

7月7日 志村佳菜子(慶応大学大学院DC)「発表題目未定」(大久保伸子)

◆関西フランス語研究会

関西大学を会場に、関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。原則として月の後半の土曜日に1回行っています。時間は、最近、午後2時から5時までを原則とするように変更しました。昨年度の発表は以下の通りです。

5月

東郷雄二「フランス語時制体系における半過去の位置づけ — Je t'attendais. 型半過去再考」

6月

松原万容「se-moyen の意味論 - 中間構文と習慣的受身文 -」

7月

藤村逸子「複数不定冠詞 des は形容詞の前でなぜ de に

変わるのか：コーパスからの推論
安達博明「commencer に関する一考察」

9月

高橋克欣「現代フランス語における補文節時制：メンタル・スペース理論による説明の試み」

12月

山本香理「節を受ける le, ça, Ø - dire, penser, savoir の場合」

山本大地「Quel ... !型感嘆文に関する考察—Que ... ! (Ce que ... !, Qu'est-ce que ... !)との違いから—」

1月

春木仁孝「Ce fut ma première rencontre avec le passé simple.—スキヤニング操作と単純過去—」

2月

森香奈絵「関係形容詞を伴う不定名詞句の特殊性—主語位置での振舞い—」

3月

中川奈津子「Reference and Metaphor in Copular Sentences: An Attempt to Describe Metaphor in Terms of Extended Mental Space Theory」

この研究会の趣旨は、論文や学会発表をひかえる人がその準備のために、あるいはまた、関東で発表を終えた人が関西でそれを聞けなかった人のリクエストにこたえてというように、形式にこだわらず、気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。また、最近の研究発表が中心ですが、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎しますので、発表を希望される方は世話人の平塚か大久保までご連絡ください。また案内はメーリングリスト Frenchling のみで行っていますので、加入されていない方は世話人までアドレスをお知らせいただければ、個別にメールでご案内いたします。

平塚徹：hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲：tomonori@ipku.kansai-u.ac.jp

最後になりましたが、昨年より、小田涼さんと森香奈絵さんに研究会の運営に多大の協力を頂いています。この場を借りて、お礼申し上げます。(平塚 徹)

8. 「海外雑誌論文目録」作成について

『ビブリオ拾い』に来てください。」と声をかけられ、当時まだ大学院生だった私が何のことやら分からないまま「ビブリオ拾い」に初めて参加したのは1999年のことだったでしょうか。「ビブリオ拾い」というのは、『フランス語学研究』巻末に掲載されている「海外雑誌論文目録」の作成のために、海外の雑誌を調べてフランス語学

に關係のある論文のタイトルを収集する作業のことです。「海外雑誌論文目録作成作業」という長い名称は、いまだに私も空では言えないくらいで、一般的には「ビブリオ拾い」の通称で呼ばれています。ビブリオ拾いは毎年年末に行われているいわば恒例行事で、作業終了後の打ち上げは忘年会的性格を帯びているため、私などはむしろそちらを楽しみにこれまで毎年参加してまいりました。

私が初参加した当時、ビブリオ拾いは早稲田大学の語学教育研究所で行われていました。「語研」の愛称で親しまれたこの建物にはさまざまな海外の雑誌が所蔵されていましたが、比較的出入りも自由で明るい雰囲気の場所でした。パソコンも備え付けられており、自由に使うことができました。ただし、このパソコンには Word がインストールされておらず、Windows に標準装備されているメモ帳を使わざるを得ませんでした。メモ帳ではアクセント記号が打てないため、数字でアクセント記号の指示を入力し、後から変換していました。今思うに、あの頃取りまとめを担当されていた方はこの点で相当苦労されたのではないかと想像します。また、何よりも語研の素晴らしかったところは出前を頼むことが出来たことで、語研の一角でみんなで過ごすランチタイムはたいへん楽しいひと時でした。

そんな語研も2004年3月末に廃止され、雑誌は同大学の中央図書館に移されました。それに伴い、2004年以降ビブリオ拾いの会場も中央図書館に変更となりました。このような会場の変更により、いくつか難点が浮上しました。第一に、中央図書館には自由に使用できる備え付けのパソコンがないため、各自ノートパソコンを持ち込んで作業しなければならないということ。第二に、中央図書館に自由に出入りできるのは基本的に早稲田大学か早稲田大学と提携関係にある慶應義塾大学の関係者だけに限られており、それ以外の人は事前に申し込みの手続きが必要だということ。また、当然のことながら図書館に出前を持って来てもらうことは出来ませんし、語研の和やかな雰囲気に比べると図書館での作業はどうしても閉塞感が感じられてしまいます。そのせいか、ビブリオ拾いが語研から中央図書館に移った際に、若干参加者が減ったように思われます。しかしながら、幸い昨年参加者全員に昼食代が、さらに専任の教員以外の方には交通費も支給されることとなり、おかげさまで、昨年は初参加の方も含め10名ほどの方々のご協力が得られ、作業は非常にスムーズに進行しました。

さまざまな困難を乗り越え、これまで何とか続いているビブリオ拾いですが、今後さらに考えていかなければならないこともあります。少なくとも私が参加して以来

関東でのビブリア拾いは早稲田大学の施設をお借りして行われております。そのため、早稲田大学名誉教授の会津洋先生の多大なるご支援により成り立っております。会津洋先生にはこの場を借りてお礼申しあげます。しかし、この先いつまで早稲田大学の中央図書館を利用させていただけるかは定かではありませんし、また、常に一部の同じ方々にばかり負担がかかってしまうのも考えものです。そろそろ現行のやり方が存続できなくなったときに備えて、別の方法を模索していく時期に来ているのではないかという気がします。現在関東では上述のとおりみんなで一箇所に集まって作業するという方法をとっていますが、関西ではいくつかの大学に何冊ずつか雑誌を割り振ってそれぞれ担当の方が収集するという方法をとっています。場合によっては関東でも関西と同じ方法に切り替える必要があるかもしれません。さらに、もし今後可能であるならば、インターネットを通じて「海外雑誌論文目録」を更新するという方法がとれば理想的ではないかと考えています。つまり、編集委員の間で雑誌を分担し、収集したデータを随時インターネット上で入力するという方法です。「海外雑誌論文目録」は『フランス語学研究』において多くの紙面を占めていることも事実であるため、将来的には学会ホームページにのみ掲載し、会員が必要ときにアクセスして調べられるようなシステムに一本化しても利便性はほとんど損なわれないのではないのでしょうか。また、現在ではインターネットで論文タイトルの情報もかなり収集できるようになっていますので、「海外雑誌論文目録」そのものの存在意義についてもどうかという見方が出てくるかもしれません。このような点につきまして会員の皆様のご意見をお寄せいただければ幸いです。(長沼圭一)

9. いま、フランスでは...

フランスで現在進行中の言語研究に関する新鮮な情報をお届けします。現在フランスに滞在中または最近まで滞在して帰国したばかりという方々にお願ひし、興味深い授業や研究会の内容、その雰囲気、活躍中の研究者、研究の環境などについて多角的に紹介する文章をご執筆いただきました。

◆ 芦野文武 (パリ第7大学博士課程)

現在パリ第7大学の博士課程に登録して、博士論文の準備をしています。2年前に実施された大学制度改革の影響で、今後博論は3年で終わらせなければならないという雰囲気が強く感じられます。5年以上かかると論文提出の延長措置をとるのが難しくなっているようで

す。

フランスでは指導教授があまり学生を指導しないという悪評があるようですが、私の場合はそのようなことはなく、大体一週間に一度指導教授との面談があります。またパリ7の言語学科は教育環境としては比較的恵まれていて、Salle Doctorants では Frantext などのデータベースが利用できるほか、小さいながらも図書館があり、貸し出しも行っています。ただ言語学関係の本、雑誌が一番充実しているのはパリ第3大学の図書館だと思います。

現在は論文の準備をしつつ、いくつか興味のある授業や研究会に出席しています。パリ7では Jean-Jacques Franckel と Denis Paillard が数年前から Mots du discours について講義をしています。従来、語用論的分析の対象になることの多いディスコースマーカ―をあくまで意味論的に分析するという立場で、今年は *réellement / en réalité, effectivement / en effet*, またフランス語の *déjà* とそれに相当するドイツ語の *schon*, ロシア語の *уж, уже*, カンボジア語の *haaj, ruoc*, ヴェトナム語の *dã, rồi* の間での対照分析も行われました。

毎週火曜日の夕方には Ulm の Ecole Normale Supérieure で Antoine Culioli の授業があります。出席者の殆どは過去に Culioli の指導の下で博士論文を書き、今では大学の先生をしている人たちで、学生はあまり多くありません。意味論に関するテーマを講義していて、今年はフランス語の *quelque(s), quoi, qu'est-ce que, quel*, ドイツ語の *sonst/umsonst* などが取り上げられました。この授業で扱われる言語はフランス語に限らず、英語、ドイツ語、古典・現代ギリシャ語、ラテン語、中国語、日本語など多岐に渡り、また特に最近ではスウェーデン語やノルウェー語などの北歐語への言及が多いです。講義内容もフランス語も非常に難解で、発話理論に関しての基礎知識がまだまだ足りない私にとっては理解が大変困難ですが、たまに、一見まったく無関係に見える複数の言語現象の間に関係があるということを見せられ、驚かされることがあります。

また昨年出席した授業の中で興味深かったものに E.H.E.S.S.での Oswald Ducrot と Marion Carel が共同で行っている2つの授業があります。1つは主に Ducrot が意味論・語用論におけるいくつかの基本概念について解説するというもので、もう1つは主に Carel が、現在自身が発展させている TBS (Théorie des Blocs Sémantiques)について講義しています。

授業のほかにもいくつかの興味深い研究会があります。毎月第1、第3金曜日にはパリ7で Sarah de Vogüé が主催する INLEX (INvariants LEXicaux) という研究グループがあり、発話理論の枠組みで研究に取り組んでいる大学

教授や博士課程の学生が参加しています。事前に発表者がメールで発表内容を参加者に送り、当日はそれに基づいて議論がなされるという形式です。会の後にはレジュメも送られてくるので、たとえ参加できなくてもおおよその議論の内容を知ることができます。最近フランス語の基本動詞 *donner*, *lever* などが扱われているようです。

また同じグループが毎月第3金曜日に、パリ14区にある Institut de Linguistique Française で TOPE (Théorie des Opérations Prédicatives et Enonciatives) という研究会を開いていて、誰でも聴講できます。毎回一人が発表するという形式で、最近では Culioli (*La flèche de l'arc poursuit sa course.*) や、小熊和郎先生 («Moo» en japonais et «déjà» en français.) の発表がありました。

◆ 小熊和郎 (西南学院大学)

2006年9月からフランシュ・コンテ大学(ブザンソン)で在外研究に従事する機会を得たので、いくつか報告したい。所属する LASELDI (LABoratoire de SEMio-Linguistique Didactique et Informatique : <http://laseldi.univ-fcomte.fr/php/accueil.php>) は5つの分野に50人ほどの研究者がいる。関係している“appropriation des langues”部門では、フランス語を含め様々な言語における言語活動の多様性、異質性、言語接触の記述と理論がテーマ。Abidjan (Côte d'Ivoire) の非標準フランス語の業績がある K. Ploog、英語学の C. Paulin、カメルーンの言語記述が専門の R. Bôle-Richard、フランス語の語彙・文法の理論と記述を行う D. Lebaud を中心に、「文法化」を巡る研究会が定期的に開かれ、J.-G. Leoué (Paris 3, 英語 *do* の文法化) とタイポロジーの専門家 D. Creissels (*Syntaxe Générale*, 2006) の講演も予定。参加者の問題意識と背景が異なるために、語彙素と形態素の境界、変化の「(単一) 方向性」の妥当性など、前提となる議論が白熱する。その他、前期には Lebaud 氏のセミナー、“*héterogénéité du texte*”, “*Qu'est-ce que le contexte/la situation en linguistique ?*” に参加したが、その延長上に、日仏テキストの談話構成や語彙文法の固有性に関する気の長い協同研究が現在進行中。当地博士課程に留学中の須藤佳子さん(「と言う」の発話論的研究)と野田弘子さん(間投詞 *hein* と日本語類似マーカの研究)との議論からも学ぶことが多い。シンポジウムなども活発に行われているが、LASELDI 主催2006年1月のコロク *Constructions verbales & production de sens* (26論文)がフランスとしては驚異的な早さで1年後に刊行されたこともつけ加えておく。

古巣のパリ第7大学言語学科の研究グループ Inlex (Invariants lexicaux) にも参加している。Linx 50 (2004) *variation sémantique et syntaxique des unités lexicales* (BELF

39号の新刊紹介参照)に展開された語彙の *singularité* と *variation* に関する協同研究が継続しているが、本年度のテーマは動詞 *lever* とその派生語 (*soulever*, *enlever*, *relever*, *élever*, など)。議論の中心は S. de Vogüé と J.-J. Franckel で、具体的問題と平行して多くの方法論上の論点が倦まず反復される。取り上げるべき言語事実や意味のバリエーションはどこまで展開可能でその限界はどこにあるのか。プロトタイプを特権化する認知言語学に対して、意味は常に関与文脈との相互作用に由来するとし、語彙の固有性 *Forme Schématique* (FS) には最低限の特化しか与えられないが、その客観性を保証するのは何か、還元不能な対象を記述するメタ言語と表層言語(エピラング)の位置づけ、記述対象とその狭義・広義の文脈が織りなす関係の複合性の一般的解明、レフェランと関与レフェランの関連など、行きつ戻りつ。今も活動を続ける Culioli 理論に深く影響を受けながらも各自の研究スタイルや論証自体が一枚岩ではない中、Linx50 にあった非均一な姿を規制する枠組みができるのか、終りのない運動がどこに向かおうとしているのか、距離をおきつつも関心もっている。最近の若手研究者としては P. Jalenques (接頭辞 *re-* の一般論の枠組み内で語彙化された *regarder* などの動詞の発話要因を分析。2000年の博論)、E. Saunier (*mettre*, *prendre*, *passer*, *tenir* の FS と用法の文脈・意味制限を周縁的用法にまで拡げ析出。1996年の博論) が特に刺激的で面白い。

最後になるが、フランス日本語教師会(会員約150名、<http://aejf.asso.fr/>) が設立10周年を迎え、その第9回シンポジウム(グルノーブル第三大学、参加者約60名)に出席した。開会式で挨拶された公使の山田文比古氏によれば、2008年度には日仏友好150周年を期に日本語教育振興のための強力なアクション・プログラムが計画されているとのこと。

◆ 金子真 (岡山大学)

文科省の「大学教育の国際化推進プログラム」により、2006年10月初めより2007年3月半ばまで、約半年間パリに滞在しました。なぜか滞在中には交付金は振り込まれず、また滞在許可証も支給されないなど、実生活上の問題はいろいろありましたが、多くの興味深い研究会や授業に参加・出席する機会を得たという点では、極めて恵まれた毎日でした。以下、そうした研究会、授業のうち、特に興味深かったものを紹介させていただきます。

私は、パリ第8大学の Anne Zribi-Hertz 氏に受け入れをお願いしていたこともあり、同大学と CNRS が運営している様々な研究会に出席しました。そもそも今回の滞在の目的は、フランス側では Zribi-Hertz 氏が、日本側では

井元秀剛氏が代表をつとめ、春木仁孝氏、小田涼氏が参加する「冠詞言語と無冠詞言語」をテーマとする日仏共同研究 (http://www.ivry.cnrs.fr/~7023web/article.php3?id_article=125 参照)を進展させることでした。当研究グループは、来年3月に、パリでミニコロックも開催する予定です。このテーマに興味をお持ちの方がおられましたら、積極的な参加をお願いできればありがたいと思います。

他には「名詞と動詞の複数性」研究会 (http://www.ivry.cnrs.fr/~7023web/article.php3?id_article=82 参照)でも、10月初めの刺激的なミニコロックを初めとして、数多くの興味深い発表を聞くことができました。

またパリ第8大学では学生が運営する研究会活動も盛んで、定期的に会合が開かれる *ciel8* (<http://ciel8.free.fr/SPIP-v1-7-2/> 参照)に加え、提携するシュトゥットガルト大学の学生・教員と成果を発表しあう *Atelier Franco-Allemand de Linguistique* という催しもありました。そこで、最近活躍が目覚しい若手研究者 Fabienne Martin 氏による、状態動詞の進行形 (ex. *il est en train de ressembler à son père*) に関する、整然としていて中身の詰まった発表も聞くことができました。

パリ8関係以外では、パリ第4大学の Francis Corblin 氏が主催する *Sémantique et Modélisation* 研究グループ (<http://semantique.free.fr/> 参照)のいくつかの催しにも出席しました。その中では「対話」をテーマとする研究会で、普段は物静かな Claire Beyssade 氏が、発表者 Nicolas Asher 氏の矛盾点を、鋭く執拗に追及していた姿が印象に残っています。どの枠組みでもそうだと思いますが、新たな理論はこのような厳しい討議を経て初めて提案されるのだということに、今さらながら思いを新たにしました。Asher 氏は、談話間の結びつきのあり方 (Narration, Elaboration など) を考慮しつつ、代名詞、時制などに関わる問題を扱う、Segmented Discourse Representation Theory (SDRT) という枠組みを推進している研究者です。この枠組みは例えば、*Jean est en train d'écrire un roman* という文の *un roman* が、後続談話において人称代名詞で受けられるのはどのような場合か、といった *created object* の照応問題などを扱う上で有効性を発揮しているようです。SDRT を含む、談話の結束性研究の様々な潮流については、Gardent & Corblin 2004, *Interpréter en contexte*, Hermes に詳しい紹介があります。

授業に関しては、軽妙な掛け合いが受講生に人気だった Dominique Sportiche 氏と Hilda Koopman 氏のヴォイスに関する共同セミナーや、毎回宿題が出て大変だったことが今では懐かしい Brenda Laca 氏のモダリティーに関するセミナーなど、本当に興味深いものが多かったのですが、ここではいずれも若手研究者である、Laurent

Roussarie 氏の形式意味論入門 (http://l.roussarie.free.fr/rubrique.php3?id_rubrique=1 参照) と、Paul Egré 氏と Mikael Cozic 氏の条件文に関する共同セミナー (http://paulegre.free.fr/Teaching/Conditionnels_2007/cond2.htm 参照) を紹介します。どちらも準備が行き届き充実した内容で、ホームページから、ハンドアウト、宿題などを入手することができます。ところで前者の授業は、*La coupure invisible* の著者 Françoise Kerleroux 氏も受講されており、氏のような大家から「意味論についてよく知らないから来ている」ということばを聞き、その謙虚さと知的好奇心に頭が下がる思いがしました。

以上、私が経験できたのは主に、生成統語論、形式意味論という極めて限られた領域の活動でしたが、近年EUの大学間で学生・教員の行き来が盛んとなり刺激を受けているということもあるのか、研究・教育両面で、パリの言語学界は活性化しているという印象を持ちました。

10. 編集後記

今年度より喜田がニューズレターの編集を担当することとなりました。「学会誌よりもニューズレターの方がおもしろい」というご意見を耳にしたことがあります。冗談とも本気ともとれますが、今までのニューズレターの内容が充実していたことに対するお褒めの言葉だと理解し、今後も同様の質の高さを維持できるよう邁進する所存です。

ご執筆いただきました皆様には深く感謝いたします。原稿をお願いするご連絡が遅くなったため締め切りまでの時間的余裕が少なくなってしまう、ご迷惑をお掛けいたしました。

なお、ニューズレターのレイアウトと版下作成、印刷打ち合わせの作業は、平塚徹氏がご担当くださいました。厚くお礼申し上げます。(喜田浩平)

News Letter のバックナンバーは日本フランス語学会のホームページで読むことができます。

<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/belf/home.html>

メーリングリスト frenchling の加入申し込み先は次の通りです。

f-ling-admin@french.lang.osaka-u.ac.jp